

『ドン・キホーテ』中国語訳の一世紀 ——「稽先生伝」から『堂吉訶徳』へ

西川 真子

一九五七年、中国北京で「外国文学名著叢書編集委員会」が発足し会議が開かれた。その席上でもしかすると次のような議論が有ったかもしれないと、勝手な想像がわたしの頭の中に浮んでしまう。

「では、今回出版計画が立ち上がった『外国文学名著翻訳叢書』の中で、セルバンテス作『ドン・キホーテ』の翻訳は楊絳同志の担当とします。」

「いや、ちょっと待つて下さい。楊絳同志は嘗て欧州に留学し、イギリスとフランスの大学で学んだというものの、スペイン文学の専門家ではありません。スペイン語も読めるのかどうか。『ドン・キホーテ』の翻訳を彼女に依頼するなんて無茶ですよ。」

「ええ、もつともなご意見です。だが、こうでもしなければ、『ドン・キホーテ』を中国語に翻訳できる人がどこにいますか？ そんな人物がいれば、教えてほしい。」

「いやいや、それが見つからないから、困っているわけで……」

「欧州では『ドン・キホーテ』の英語訳も仏語訳も複数出版されているし、スペイン語ではなく、英訳本か仏訳本を底本にして中国語に重訳すればいいんですよ。それなら楊絳同志にはお手の物でしょう。文章の上手さには定評が有るし」

「楊絳同志は去年、一八世紀フランスの作家ル・サージュの小説『ジル・プラス』を中国語に翻訳したんですね。」

「はい、つい最近、人民文学出版社から出版されました。中国語の書名は『吉爾・布拉斯』です。この作品の舞台はスペインに設定されていて……」

「そのとおり！ やはり『ドン・キホーテ』は楊絳同志に翻訳を依頼し

ましよう。だいたい『吉爾・布ラス』を読んだ中国共産党中央宣伝部部長の林黙涵同志から、『ドン・キホーテ』は楊絳同志に翻訳させるようにと、指示があったわけですし。」

この話の背景について述べると、最初に登場する『外国文学名著叢書』は『外国芸理論叢書』、『マルクス主義文芸理論叢書』と並び、中華人民共和国成立後、中国共産党政権が文化政策の一つとして編集出版を開始した三つの叢書の一つだった。中国政府はこれら三つの叢書を刊行するために「三叢書編集委員会」を立ち上げた。その中で『外国文学名著叢書』は中国社会科学院外国文学研究所、人民文学出版社並びに上海訳文出版社が担当することになった。一九五七年同委員会の編集会議が開かれた。その席上、叢書に収める作品の一つとして『ドン・キホーテ』を選び、その中国語訳を中国の文学界で特異な存在感を示す楊絳という人物に依頼したのだった。その後では、中国共産党宣伝部副部長林黙涵の意向が働いていたと言う。この命令に応えて翻訳者楊絳は約二十年の歳月の後、一九七八年に『堂吉訶徳』二部全訳本を人民文学出版社から世に送り出した。この事実を振り返る時、同叢書編集会議の席で前述のようなやり取りが有ったとしても決して不思議はないと思えてしまうのだ。

一九五〇年代後半、つまり中華人民共和国が建国から十年を迎えようとしていた頃、同国では外国文学の名著として、『ドン・キホーテ』を現代中国語に翻訳すべしという風が吹いていたのは間違いない。この仕事が何故楊絳という人物に委ねられたのか。そもそも現代中国の読者は如

何にして『ドン・キホーテ』に出会い、この書を読んできたのか。『ドン・キホーテ』は原作が誕生してから、世界の六十カ国近くの国々で翻訳版が刊行されてきた。日本だけでも明治時代から現在までの間に十種類以上の翻訳があるという。『ドン・キホーテ』が隣国中国に残した足跡を辿ってみたい。

はじまりは「稽先生伝」から

中国で『ドン・キホーテ』が最初に紹介されたのは、一九一三年のこととされている。当時上海で発行されていた雑誌『独立周报』第二巻第七、八号に「稽先生伝」という表題で原作の第一章と第二章のみ漢訳して掲載されたという。(樽本照雄「セルバンテス最初の漢訳小説——『谷間鷺』について」——『清末小説から』(通訳) 95所収)

「稽先生伝」が掲載された『独立周报』は一九二二年から一九一三年にかけて約十か月間刊行された、当時の政治家でジャーナリストだった章士釗が出版し、政論時評、文芸作品等を掲載する総合雑誌だった。「稽先生伝」の翻訳者は馬浮(筆名は被褐 一八八三〜一九六七)、清末に米国、日本に留学経験が有り、英語、日本語、ドイツ語に通じ、後に浙江大学等で教鞭を執った。この訳文の表題にある「稽先生」という表現形は、清末から一九二〇年代にかけて、中国の言論雑誌などで使われた。よく知られたところでは、中国共産党初期の指導者陳独秀が自ら発刊した雑誌『新青年』に、「民主と科学」の概念について論じる際、democracyを「民主」と意識する一方で、これを音訳した漢語表記「德莫克拉西」に基づいて、これを「徳先生」と書いた。同じく science は意識した「科学」を用いると同時に、音訳語「賽因斯」の第一字を取って「賽先生」と記されている。

馬浮訳「稽先生伝」はスペイン語ではなく英語版を底本に、原作の第一章と第二章を漢訳した作品で、主人公のドン・キホーテ氏には稽叔先生の訳語が用いられている。つまり中国における『ドン・キホーテ』は「愛おしくも、やることなすこと世間の笑いの種となる、稽先生の冒険譚」として登場したのだった。

「稽先生伝」の発表から約十年後の一九二二年、上海商務印書館は林紵、陳家麟訳『魔侠传』全二冊を出版した。「稽先生伝」が、僅か十か月

で終刊になった短命な雑誌の記事として発表されたためか、次第に忘れ去られていったのに対し、『魔侠传』は中国初の『ドン・キホーテ』の翻訳本として、中国における外国文学受容の歴史に名をとどめている。訳者の林紵(一八五二〜一九二四)は清末から一九二〇年代に欧米及び日本の小説を多数翻訳した人物である。但し、林紵自身は外国語に通じず、他者が外国語から漢文に訳出した原稿を中国語の文語文に書き直して訳文を書き上げた。白話が普及する前の中国では、林紵氏の訳著は多くの読者を得た。例えばデュマ原作の『椿姫』は林紵訳『巴黎茶花女遺事』の書名で出版され、広く人気を博する作品となった。『魔侠传』も「稽先生伝」と同じく英語版から漢文に訳出された。また『魔侠传』は全二冊として出版されたが、同書に収められたのは原作の中の前編だけで、後半部分は翻訳から外された。

『ドン・キホーテ』が全文中国語に翻訳されるには、中華人民共和国の成立後一九五〇年代まで待たなければならなかった。この訳業に挑んだのは傅東華(一八九三〜一九七一)という人物だった。彼は一九一二年上海南洋公学中学部卒業後、翌一九一三年に中華書局に翻訳員として入社、後に上海復旦大学の教授となつて、英語教育、英文学の研究並びに英米文学の翻訳に携わった。翻訳家としての傅東華の業績は、ギリシャの詩人ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』、ミルトン作『失樂園』、メーテルリンク作『青い鳥』、ホーソン作『緋文字』、マーガレット・ミッチェル作『風と共に去りぬ』等英米の文学作品のみならず、英語以外の言語で書かれた作品も英語版から中国語に翻訳したことでも知られている。彼の訳業の一つ「風と共に去りぬ」は中国語版の書名を『飄』(簡体字の表記では飄、つむじ風の意)と言い、現在も中国で愛読されている。

一九三九年、傅東華は上海商務印書館から『ドン・キホーテ』の中国語訳『唐吉訶徳先生伝』第一部を発表したが、日中戦争の混乱の中、第二部の完成は二十年後を待たねばならなかった。結局、傅東華の『ドン・キホーテ』は、一九五九年人民文学出版社から『唐吉訶徳』第一部、第二部を合わせた全訳本として出版された。ここに『ドン・キホーテ』の中国語全訳本が完成したわけが、傅東華の『唐吉訶徳』は英語版からの重訳である。『ドン・キホーテ』をスペイン語原作から中国語へ翻訳する大仕事の担い手は未だ現れなかった。

『外国文学名著叢書』と『唐吉訶徳』

一九五七年に編集が始まった『外国文学名著叢書』には発足以来現在に至るまで、世界の名著に相応しい作品の中国語版が途切れることなく加えられている。その中で最も早い時期に叢書に収められた例として、次のような作品が挙げられる。

- 『イブセン劇作集』（潘家洵訳 一九五八年）
- 『アンデルセン童話選』（葉君健訳 一九五八年）
- 『ゴリーキー』『母』（夏衍等訳 一九五八年）
- 『ル・サーージュ』『ジル・ブラス』（楊絳訳 一九五八年）
- 『シヤクンタラー』（季羨林訳 一九五九年）
- 『デフォー』『ロビンソン漂流記』（徐霞村訳 一九五九年）
- 『サッカレー』『虚栄の市』（楊必訳 一九五九年）
- 『エウリピデス悲劇二種』（羅念生訳 一九五九年）
- 『アイスキュロス悲劇二種』（羅念生訳 一九六一年）
- 『ソフォクレス悲劇二種』（羅念生訳 一九六一年）
- 『スウィフト』『ガリバー旅行記』（張兼訳 一九六二年）
- 『インツプ寓話』（周啓明訳 一九六三年）

これら以外にも、『外国文学名著叢書』の中には世界各国で多様な言語に翻訳され、幅広い読者に愛読されている作品が収められている。この叢書から『ドン・キホーテ』を外すことは出来なかつただろう。なお、同叢書に日本の作品が収められるようになったのは一九七二年の日中国交回復後十年近くを過ぎた一九八〇年代以降のことで、島崎藤村『破壊』（柯毅文 陳徳文訳 人民文学社 一九八二年）、『二葉亭四迷小説集』（現長金 石堅白訳 人民文学 一九八五年 一九六二年に単行本として出版）、『万葉集選』（李芒訳 人民文学社 一九九七年）が選録されている。

『外国文学名著叢書』という題目が示すように同叢書には外国文学の名作を収めることを目的としたが、中国共産党が建国した中国には、その出版に相応しい新たな訳著が必要だった。『ドン・キホーテ』に関しては、この叢書計画の発足と相前後する一九五九年に先述した傅東華訳『唐吉訶徳』が刊行されていた。だが、同書の第一部は一九三〇年代末に翻訳されたもので、中国共産党が指導する文化事業の中に民国時代の作

品を選ぶわけにはいかなかったのだろう。

新しい『ドン・キホーテ』を担当する翻訳者の人選は難航した。かつて、『ドン・キホーテ』を叢書から外すわけにはいかなかった。スペイン語の原書から中国語に翻訳するのが難しければ、英語からの重訳という方法が考えられる。「稽先生伝」以来、林紘『魔侠传』、傅東華『唐吉訶徳』まで『ドン・キホーテ』は英語版から中国語に重訳されてきたことも、この案を後押ししたかもしれない。その結果、『ドン・キホーテ』の翻訳を命じられたのが楊絳だった。楊絳はスペイン語を学んだ経験はなかった。だが、ル・サーージュ作『ジル・ブラス』をフランス語から中国語に翻訳し、同書は『外国文学名著叢書』の列に加えられている。叢書編集会議では、翻訳者としての楊絳の実力は保証できる、重訳ならば楊絳が『ドン・キホーテ』を翻訳するのは十分可能だと判断されたのだろう。

楊絳に『ドン・キホーテ』の翻訳者として白羽の矢が立った背景には、彼女を取り巻く家族の事情も作用したと考える。その筆頭は楊絳の夫銭鍾書だった。銭鍾書は清華大学外文系の出身で、英語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ラテン語、ギリシア語に通じ、ヨーロッパ各国の文学作品に明るい読書家として知られていた。また一九三五年から三八年にかけてイギリス、フランスに留学して研鑽を積んだ銭鍾書は、外国文学の研究者として拔き出た存在であると同時に、中国古典文学の研究でも優れた成果を上げた。一九五〇年代以降楊絳が外国文学の翻訳に力を注ぐすぐ横で、銭鍾書は『宋詩選注』『管錐編』等、中国古典文学研究の名著を書き上げることになる。

さらに、楊絳の実妹楊必もまた翻訳者としての天分を知られる人物だった。楊必はサッカレー作『虚栄の市』を翻訳し、その訳業は同叢書に収められている。楊必は上海の震旦女子文理学院で学び、姉楊絳と同様に英語が堪能だった。特に翻訳の才能に恵まれた楊必のために、楊絳の夫銭鍾書は既に中国語に翻訳されていたサッカレー作『虚栄の市』を新たに翻訳し直すようにと楊必に推薦した。楊必は周囲の期待に応え、サッカレーの代表作を『名利場』という題名で翻訳したのだった。

こうした事情が絡み合い、『ドン・キホーテ』が巻き起こした風は、楊絳のもとに吹き込んでくることになったのだ。

ドン・キホーテをつかまえに行つた人―楊絳

『ドン・キホーテ』の風に煽られた、楊絳とはどんな人物だったのか。楊絳、本名は楊季康といい、一九一一年北京に生まれたが、本籍は江蘇省無錫の人だった。父親は青年時代に日本とアメリカに留学して学業を修めた後、江蘇省高等審判庁長、上海申報館副編集長等を歴任し、弁護士としての経歴も持つ人だった。楊絳はこの父親の下、八人の姉妹兄弟の四女として、父方の叔母たちも加えた大家族に囲まれて育つた。女学校を出た後、一九三二年に蘇州の東呉大学法学系を卒業したが、好きな文学を修めるため清華大学研究院外文系に進学した。楊絳は清華大学在学中に同じ無錫出身の錢鍾書と巡り合った。一九三五年、二人は卒業と同時に結婚、錢鍾書がイギリスとフランスに留学するのと同じ楊絳も渡欧した。留学中の一九三七年には娘の錢瑗が誕生し、家族三人は一九三八年に帰国した。この頃中国は日中戦争が激しくなる時代に突入していたが、日本占領下の上海で家族や友人に支えられて教師の仕事をしながら苦境を乗り越えた。戦争によって生活が脅かされる中でも、喜劇『称心如意』（お気に召すまま）、『弄真成假』（まことから出たうそ）など、喜劇作品の創作を手掛けた。楊絳は喜劇の書き手という入り口から文学者の道を歩みだしたのだ。

一九四九年中華人民共和国の成立後、夫婦ともに北京の清華大学に招聘され、楊絳は大学で英文学の講義を担当することになった。一九五三年以降は文学研究所（後の中国社会科学院外国文学研究所）に移り、外国文学の研究と翻訳を中心とする生活が始まった。その成果として楊絳は五〇年代から六〇年代にかけて、『ラサリリーヨ・デ・トルメスの生涯』、『ジル・プラス』等を翻訳、サツカレー、オースチンを取り上げた論考も発表している。

さて、『ドン・キホーテ』の翻訳者に仕立てられた楊絳は、英語とフランス語には堪能だったが、スペイン語には不案内だった。そのため外国文学叢書編集委員会は楊絳に『ドン・キホーテ』の中国語訳は英語版からフランス語版から重訳するという形で翻訳を依頼したのである。

スペイン語を学んだ経験はなく、つまり『ドン・キホーテ』を原書で読んだことがない楊絳がこの仕事を迷いもなく引き受けたとは思えない。楊絳自身も「三叢書編集委員会から命じられて『ドン・キホーテ』の重訳を引き受けた」と回想している。ただ、この翻訳を楊絳が引き受ける

に当たり決め手になったのは、同叢書の編集委員会の依頼とともに中国共産党中央宣伝部副部長の任にあった林黙涵の指示があったことが大きく作用していると言われる。

楊絳は任務を引き受けると直ぐに、当時最も評価の高かった英語とフランス語の翻訳書五種類の比較検討から手を付けた。この件について、翻訳を引き受けた楊絳は後年新聞記者のインタビュアーに対し、「五種類の訳本はどれも一長一短で、底本を選ぶのは難しかった。つまりこれはきつと、どの訳本も原作とは別物だということを意味していると考えた。そこで思案の末、原作に忠実であるためには、原文から翻訳するしかないという結論に達した」と語っている。こうして一九一一年生まれの楊絳は、五十歳を前にして、『ドン・キホーテ』を原文から中国語に翻訳するために、スペイン語を初歩から学ぶ決意を固めたのだ。その後楊絳は「一九六〇年三月、わたしは『スペイン語入門』を読み終え、スペイン語で書かれたラテンアメリカの小説を読み始めた」と言う。易しい読み物から少しずつ難度の高い作品が読めるようになった時、楊絳はスペイン王室アカデミーのフランシスコ・ロドリゲス・マリオン氏が監修し、最も権威が有ると評価される書を底本に決めて翻訳の筆を執った。

一九五七年、楊絳には『ドン・キホーテ』が巻き起こした突風から最初の一撃が吹きつけただけでなく、さらに高いところから不穏な風雨が押し寄せようとしていた。この年、中国では中国共産党の政策に批判的な知識人を摘発するために「反右派闘争」が始まった。特に言論思想、文化、教育関係者の中で「右派分子」と見做された知識人は厳しい追及を受け「罪状」を糾弾された。一九七〇年代末に示された見解では、一九五七年に右派として追放された知識人は五十万人以上を数えた。政治の嵐に吹き晒された知識人たちは、口をつぐみ意見を述べることが止めた。この黒く冷たい雨は楊絳の上にも容赦なく降り注いできた。「引き裂かれて粉々にされてしまった」楊絳は創作の筆を置き、「私はひそかに決意し、二度と文章など書くものかと、これ以降翻訳に引きこもることにした」（桜庭ゆみ子訳『別れの儀式』）という。楊絳は自分の意見を表に出さなくても済むように翻訳作業の中に隠れようとしたのだが、政治闘争の嵐は隠れ蓑の下から楊絳を引きずり出した。ドン・キホーテは楊絳を匿い損ねたのだ。中国指導部の急進派は知識人を「再教育」するために彼らを農村に下放した。一九五八年十一月楊絳は志願して下放の列に加わった。二カ月後楊絳は「再教育」を終え北京の職場に戻ってき

だが、その後十数年間、楊絳と夫錢鍾書、娘錢瑗は土砂降りの雨に叩きつけられることになる。それでも楊絳は一旦手に執った『ドン・キホーテ』を翻訳するための筆を手放そうとはしなかった。

一九六五年三月、五年の歳月をかけて楊絳訳『堂吉訶徳』第一部は完成した。

知識人を混乱の中に投げ込んだ「反右派闘争」につづいて大躍進期の大騒動に揺さぶられ、一九六六年には「中国文化大革命」（以下、文革）がはじまった。文革によって、知識人の生活は足元から何もかも引つ繰り返された。文革の最中、楊絳と夫錢鍾書は河南省の農村に下放され、翻訳はもちろん自由に本を読む事さえ難しい体験を強いられた。

政治学習に励んでも、農村労働で鍛え直そうとしても、性根が入れ替わらない知識人は大衆の前に引きずり出され、「ブルジョア階級の學術權威」のレッテルを貼られた。楊絳もまた職場の批判大会で「つるし上げ」の対象となった。その結果、所属していた社会科学学院外国文学研究所では研究員としての仕事を禁じられ、研究所内のトイレ掃除が彼女の仕事となった。自宅は隅から隅まで「家宅捜査」の手が入り、拳句の果てにまともな家に住むことを断念しなければならなかった。一九五〇年代後半から一九七七年まで、楊絳一家にあてがわれた住まいは、所属先である文学研究所の建物の中の事務室の一角で、それが「我が家」となった。ここでは食事と睡眠も同じ部屋で済ませ、廊下にある台所は他の家族と共用、トイレも兼用だった。次々といろいろなものを奪われても、楊絳はこの場所で『ドン・キホーテ』の翻訳をつづけた。楊絳は職場の事務室を板で仕切った棲み処を「南の窓側、ベッドの横の壁に貼り付けるように小さな机をおいてあるが、これがわたしの書き物机である。わたしは丁度翻訳に取り組んでいる最中だった。机には原稿用紙の束と本一冊を置けばもう一杯だったので、たくさんある大型の辞典はみなベッドの上を広げてあった。わたしにはこの部屋以外に身を置く場所などなかった」（前掲『別れの儀式』）と回想している。

楊絳は、『ドン・キホーテ』の訳稿を暇を盗んで一滴ずつぽつぽつりと貯めた「へそくり」で書き綴ったという。（楊絳（著）、中島みどり（訳）『お茶をどうぞ』）だが、一九六七年、文革派はとうとう楊絳の「へそくり」で何とか奮闘していた『ドン・キホーテ』を生け捕りにしてしまった。『ドン・キホーテ』は「黒い原稿」とみなされて文革派の手に渡ってしまったのだ。楊絳はこの時までに『ドン・キホーテ』の原書第

一部と第二部全八冊のうち、第六冊の途中まで訳し終えていたという。彼女は『ドン・キホーテ』の原稿一式を文革派に引き渡した。『ドン・キホーテ』を密かに匿っているよりも、素直に提出した方が安全だと考えたからだ。だが楊絳はその直後から、訳稿を手放してしまったことを悔やみ始めた。そのため彼女は『ドン・キホーテ』を救出するために、密かに自分の訳稿の行方を捜し始めた。しかし『ドン・キホーテ』はあちこちから集められた夥しい数の「黒い原稿」の中に紛れ込んでなかなか姿を現さなかったが、楊絳は粘り強く行方を追った。接収され囚われの身となっていた『ドン・キホーテ』が解放されたのは翌年のことだったという。（前掲『お茶をどうぞ』）楊絳は当時を回想し、「『ドン・キホーテ』の訳稿が無事だったのは、「黒い原稿」として「捕虜」になっていたためだ」と述べている。（楊絳（著）、中島みどり（訳）『風呂』あとがきより）

文革の嵐が通り過ぎるには一九七六年の秋まで待たなければならなかった。その間も楊絳は『ドン・キホーテ』を支えつづけた。一九七六年十一月『ドン・キホーテ』の翻訳が完成した。その後訳全文を見直し、人民文学出版社から『堂吉訶徳』初版が上下二冊で出版されたのは一九七八年である。この翻訳によって、楊絳はスペイン国王より勲章を受けた。楊絳の『堂吉訶徳』は最も信頼できる中国語の訳本として評価され、初版の出版から現在まで発行部数は七十万冊以上に達している。

幽黙の騎士

楊絳はユーモアを湛えた作家だと言われる。一九四〇年代、日本の占領下で厳しい生活を強いられながら、『弄真成假』（まことから出たうそ）など、題名を見ただけで喜劇と分かる作品を創作した人である。一九八〇年代以降、次々に発表した小説や随筆の端々からは、楊絳が反右派闘争や文革の混乱を静かに見つめ、自分に向けられた理不尽な仕打ちを、涙が出るほど可笑しい事件に変えてしまっからだ。

「ユーモア」という言葉は明るい陽射しを連想させる。楊絳は前向きで生命力に溢れた人だ。そのため彼女の作品からユーモアを感じる読者も多いのだろう。

ユーモアは中国語では「幽黙」と翻訳する。英語の humor を音訳した

のであり、humorを中国式に解釈し、その意味を表す漢字を当てた訳語である。楊絳には「幽默」が似合う。一歩引いたところに隠れている、かすかな気配、誰も知らないことに気付き、静かに感じ入る。「おや、そんなことも有るのか」と、物事の別の一面を見つけて楽しむ人を、「幽默が分かる」と言うのだろう。

『ドン・キホーテ』はユーモア小説だと称される。主人公は世の中の不正を糾すために何者も恐れず、敵に叩かれ散々な目に遭っても挫けない。この作品には、登場人物がもうとつくに死んでしまっていておかしくないほど重傷を負う一幕も、ふざけたバカ話に変えて笑い飛ばしてしまう箇所が随所にちりばめられているからだろうか。

ある作品が、どこか他の国で別の言葉に翻訳されるには、それぞれ事情が有る。一九五七年の中国で、『ドン・キホーテ』は英語かフランス語からの重訳でいいから楊絳が翻訳をと命じられたことに、本当はどんな事情が有ったのか門外漢のわたしには分からない。ただこの命令が下った結果、楊絳は本物の『ドン・キホーテ』を捕まえるために五十歳を前にしてスペイン語を勉強する決意を固め、反右派闘争と文化大革命の時代には『ドン・キホーテ』の陰に隠れつつ『ドン・キホーテ』を養った。楊絳は『ドン・キホーテ』が「幽默の騎士」だと見抜いていたし、『ドン・キホーテ』の翻訳を手放せば楊絳は知識人への迫害がつづく中で自分の行き場が無くなることを知っていたからだだった。

物書きとしての楊絳は、『堂吉訶徳』の完成後、翻訳よりも自著の執筆に力を注ぐようになった。一九八一年に出版された散文集『干校六記』（邦題『幹校六記』中島みどり訳）、一九八一年短編小説集『倒影集』（倒影集）、一九八七年『将饮茶』（邦題『お茶をどうぞ』中島みどり訳）、一九八八年に長編小説『洗澡』（邦題『風呂』中島みどり訳）、二〇〇三年に発表された自伝的随筆集『我们仨』（邦題『別れの儀式 楊絳と錢鍾書』桜庭ゆみ子訳）を次々に書いた。いずれも翻訳ではなく楊絳自身の手になる創作である。これらの作品は概ね楊絳と家族の物語が下敷きになっている。『堂吉訶徳』が中国の読者に受け入れられたのを確かめた時、楊絳は二十年余りの間、引き出しの中にしまっていた自分の想いを書くための筆を執ったのだ。

中華人民共和国は、建国以来如何なる道をたどって来たのか、知識人たちはそれぞれの立場から一部始終を振り返り、実録、回想録、小説、そして演劇や映画という形で作品にした。楊絳の書いた散文や小説もそ

の中に含まれるが、その語り口は異彩を放っている。

『ドン・キホーテ』の世界では、楊絳以降次々と中国語の新訳が刊行されている。楊絳は正式にスペイン語を学んだことがない。三年間足らず独学でスペイン語を学んでこの大著の翻訳に手を付けた。そのため後に、楊絳の訳には間違いが多いという指摘が聞こえてきたのも事実だ。こうして『ドン・キホーテ』の中国語訳は、スペイン文学の専門家たちが挑むところとなっていた。その中では一九九五年に出された董燕生の翻訳、二〇〇一年出版の孫家孟の翻訳が高い評価を得ているが、現在までに中国語に翻訳された『ドン・キホーテ』は合計で二十種類に達すると言う。

『ドン・キホーテ』は世界中で数々の言語に翻訳され、『聖書』の次に読者数が多い書物だと言われると聞く。原作に力が無ければ翻訳版は生まれにくい。中国でも日本でも、『ドン・キホーテ』の翻訳の試みはこれからも続くにちがいない。

(にしかわ まこ)

参考資料（楊絳の著作集および、日本語訳が出版されているもの）

『楊絳文集』人民文学出版社二〇〇四年

『幹校六記』《文化大革命》下の知識人 楊絳（著）、中島みどり（訳）みすず書房

一九八五年

『お茶をどうぞ』楊絳エッセイ集 楊絳（著）中島みどり（訳）平凡社 一九九八年

『風呂』楊絳（著）、中島みどり（訳）平凡社 一九九二年

『別れの儀式 楊絳と錢鍾書』楊絳（著）、桜庭ゆみ子（訳）勉誠出版 二〇一二年